

浮世絵に描かれた有松絞店

尾張の篆刻家
余延年



山田芳写真資料

—よみがえる伊勢湾台風的光景

鈴木雅

今から六十年前の昭和三十四年（1959）九月二十六日、東海地方に伊勢湾台風が襲来した。五千名以上の命を奪ったこの大災害は、災害対策基本法制定の契機となるなど、日本の災害史上大きな画期をなしたことで知られている。

近年名古屋博物館では、伊勢湾台風資料の収集・調査研究を進めているが、その大半は写真資料が占めている。写真による災害記録自体は、明治二十四年（1891）の濃尾震災の頃から撮影されているが、当時はまだ都会に数軒あるかないかの写真館の主たちが、公的機関から委嘱を受けて撮影したものであった。これに対し、昭和三十年代は一般市民の手元にもカメラが普及し始めた時期で、多くの市民が私的に写真を撮影したところに伊勢湾台風の特徴がある。

（次ページへ）

名古屋博物館
だより
2019.10.1
228

山田芳写真資料 —よみがえる 伊勢湾台風的光景



那古野村之古図 と奥村得義



名古屋博物館だより 228号
令和元年(2019) 10月1日
年2回(10月、4月)発行

編集・発行／名古屋博物館
〒467-0806
名古屋市瑞穂区瑞穂通 1-27-1
TEL 052-853-2655
FAX 052-853-3636
http://www.museum.city.nagoya.jp

古紙を含む再生紙使用



夕暮れの白水町（山田芳写真資料より）
大同病院前より西向きに撮影。

那古野村之古図と

奥村得義

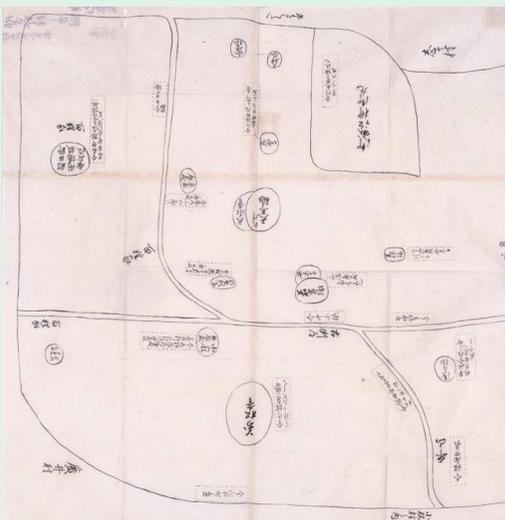
岡村弘子

現在の名古屋城のあたり、名古屋台地の西北端に存在していた中世城館を、近世名古屋城と区別して「那古野城」と呼んでいます。名古屋台地上には古くから人々のくらしが営まれ、中世には「那古野荘」が存在していました。室町時代になると今川氏の庶流・那古野氏の拠点となり、このころ城館としてのすがたとなったと思われます。天文七年（1538）に織田信長の父・信秀が那古野城を奪い、尾張東部への足がかりとして信長に引き継いでいきます。

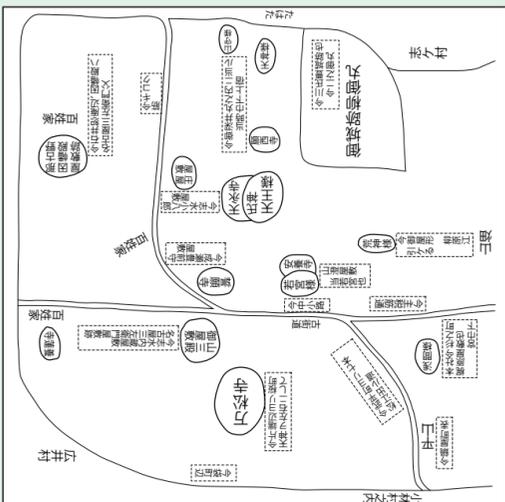
近世名古屋城築城にあたり、那古野城の「帯は大規模な造成が行われ、その痕跡は失われました。江戸時代中期にはすでに城の位置も諸説入り乱れて分からなくなっていたようです。

館蔵のこの絵図は、裏の題簽に「鈴木秋豊家蔵 那古野村之古図 奥邑徳義」とあり、更に朱字で「鹿（粗）図也」と記されます。絵図には東西に通じる道に「古街道」と記され、これに西北へ抜ける道と東南へ抜ける道が記されます。右上部の区画に「御城跡柳御丸」とあり、その脇に「今川氏豊城跡也 今二之御丸」の文字が点線で囲われます。その他「万松寺」「天王様」「那古野因幡殿屋敷跡」といった寺社・屋敷などのランドマークが記されます。点線囲いの文字には、後世の位置比定といった校訂情報が記されているようです。

題簽に名のある奥村得義（徳義・1793～1862）は、近世名古屋城の百科事典『金城温古録』の編者として知られる尾張藩士で、当絵図はその旧蔵資料として伝来したものです。付属紙面には嘉永三年（1850）六月に記した、彼自身の識語が加えられています。それによると、この図は尾張藩士鈴木秋豊の所蔵品を得儀自身が書写したもので、貼札の剥がれが著しいため相談に得義のもとに持ち込まれたとのこと、同じく尾張藩士で世相記録『青窓紀聞』の編纂者でもある水野正信も同内容の「精図」を所蔵していたことが分かります。この「粗図」はすでに得義が所蔵している「小図」と比較し格段に大きいため、書写することになったようです。



那古野村之古図



那古野村之古図トレース 北を上にして表示

得義によれば、虫食い等もあって古びており、剥がれた貼札は元の場所を推測し、点線で表現するなど、原図に忠実に写したとあります。

さらに得義は考察として、この図は公的なものではなく民間で作成されたものだとし、「かつて遷府以前に名古屋に居住し、遷府の際に幅下へ移住した民の一人が、家蔵の古文書や古図を約三十年前に売却してしまった」という話に触れ、これがその図の写ではないかと推測しています。

得義は、文政四年（1821）に名古屋城調査に関する藩命を受け、天保十三年（1842）から『金城温古録』の執筆を開始し、安政五年（1858）に第四巻までの校閲をすませ、清書に入ります。まさに『金城温古録』の執筆中にこの図と出会ったこととなります。

最終的に、当図は「此図ハ名古屋村庄屋より御普請奉行工書出候写之由」と標銘されて『金城温古録』の第二巻に収録されましたが、掲載図には貼札部分の情報はありません。おそらく得義は絵図作成時の情報ではないとして割愛したと思われるのですが、この貼札部分の情報も、当時の研究のひとつの到達点と位置づけることもできます。

『金城温古録』にはこの図と共にもう一点、「慶長以前那古野村之図 寛永年当村庄屋より出ス」と標銘される絵図が掲載されています。こちらは文化四年（1817）七月に月廻舎の所蔵品を書写したと記されます。月廻舎については不明ですが、この「慶長以前那古野村之図」の元になったと思われる図も、館蔵の得儀旧蔵資料の中に遺されています（但し東半分のみで西半分は散逸）。さらにこの「慶長以前那古

野村之図」は徳川林政史研究所所蔵の水野正信旧蔵資料の中にも遺されていました。

「那古野村之古図」の識語と、伝来状況を合わせ見ると、名古屋古図とされるものは粗図と精図の二種類あり、得義が所持していた「那古野村之古図」が、貼紙の朱書通り「粗図」であるなら、水野正信が所持していた「慶長以前那古野村之図」が「精図」ということとなります。そして嘉永三年に「那古野村之古図」が得儀の元へ持ち込まれたことをきっかけに、精粗の両図が合わせて検討が進んだことがわかります。

ちなみに精粗両図の違いは、精図とされる「慶長以前那古野村之図」の方が樹木や集落なども一部絵画的に表現されており、確かに情報量が多くみえます。ただし、おそらく原図制作当初の文字情報自体はほぼ同一で、後世の位置比定・考察部分にそれぞれの書写時期に応じて違いが見られる程度です。そして「粗図」とされる「那古野村之古図」（本図）については、表現は簡潔ですが貼札の情報明確で書写時期に符合しているため、この情報を元にある程度当時の位置関係を復元することが可能です。

あくまで後世の書写による考察ではありませんが、那古野城のすがたを探る手がかりのひとつとして検討することも、大切な作業かと思われます。

*本図は特別展 発掘された日本列島「二〇一九」・地域展「尾張の城と城下町 三英傑の城づくり・町づくり」（11月16日～12月28日）に出品します。

浮世絵に描かれた有松絞店

●**宣伝チラシとしての有松**

先ごろ有松地区が「日本遺産」に認定されたが、その魅力としてあげられたのが「浮世絵さながらの」町並みであった。そこでこの機に(東海道作品ではなく)、絞店の宣伝という目的をもって描かれた浮世絵を紹介しておきたい。



挿図1 歌川広重「有松絞 竹谷佐兵衛店先」35.0×46.0cm 館蔵

●**有松絞店**

いずれも出版検閲印や版元印が無いことから、一般販売品ではなく店が独自に発注した摺物、つまり宣伝チラシとみられる。似通った雰囲気を持つが、大きさや枠などの体裁が異なるため、同一シリーズではなく、別々に注文されたものだろう。

挿図1は、幕末を代表する浮世絵師歌川ひろ重(初代、1797~1858)が描いた錦絵(多色摺木版画)で恐らく賛も広重によるもの。いわゆる大倍版という大きめのサイズである。落款の書体や人物の描き方により、弘化・嘉永年間(1844-54)頃の制作と思われ、画中に「彫竹」(江戸の彫師、横川竹二郎)とあることから、江戸で版木が制作されたことが分かる。また、当館では所蔵していないが、広重には他に「尾州有松絞店之図 河村弥平店先」がある。

挿図2、3、4は、名古屋の小田切春江(1810~88)が描いた錦絵で、やはり賛も全て自身で記す。挿図2は大判、挿図3、4は大倍版。なお挿図2は画中に「彫工 豊原堂刀」とあり、名古屋で制作されたことが分かる。

いつごろ作られたものなのか。これが一筋縄ではいかない。なぜなら挿図2には、駕籠や振り分け荷物の一行を、洋傘を差した男や人力車に変貌させた異版が存在するのだ。つまり時代の変化に合わせて、版木の一部分を彫り直して修正しているというわけ。当然、他の図にも同様の可能性があるた

め、制作年代の同定には慎重を期さなければならない。また挿図3では、大代替りしたためだろうか、のれんに染められた「山形屋庄五郎」に朱色の訂正(不読)が入るほか、新たに「浪花講」の看板がやはり朱で追加されている。しかし、こうした異版が存在するおかげで、これらの商品寿命が思いのほか長かったことが分かる。

現段階では、いずれも幕末、とりわけ挿図4については文久・慶応年間(1861~68)とみておきたい。



挿図2 小田切春江「有松絞 舛屋喜三郎店先」24.0×35.2cm 館蔵 (中村新三コレクション)



挿図3 小田切春江「有松絞 山形屋庄五郎店先」36.8×49.8cm 館蔵



挿図4 小田切春江「有松絞 丸屋丈助店先」36.7×48.9cm 館蔵

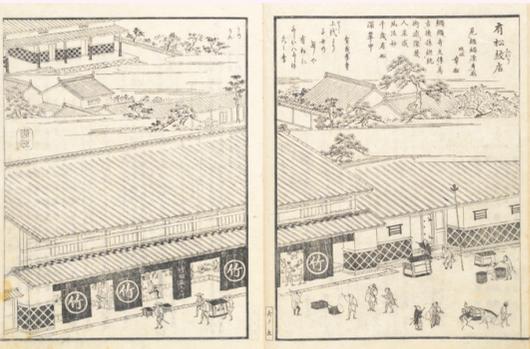
●**広重と春江**

はたして江戸の絵師である広重が、実際に竹谷佐兵衛の店を見て描いたのだろうか。

天保8年(1837)、広重は宮宿から矢矧橋を渡って、つまり東海道ルートをたどって江戸に戻る旅をしている。ならば有松も通っていると考えるのが順当だろう。しかし、だからといって写生に基づいた浮世絵だと断定するのはためられる。いくら広重とて、一軒ずつ足をとめて、つぶさに観察したわけではあるまい。

ではどうやって描いたのか。実は広重には、地方発注の錦絵が他にもある。それらの制作状況を見ると、どうやら現地の絵師から送られてきた草稿を元にして描いているようだ。恐らく、ここにあげた絞店のチラシも同様だったのではないか。この場合、草稿を手掛けたのは、『尾張名所図会』で竹田庄九郎家を描いた経歴を持つ春江その人だった可能性が高い。そう考えれば広重作と春江作で、店舗をやや上から俯瞰しながら雲をたなびかせる構図が似通うのも納得がいく。

商品の主たる顧客が、東海道を往還する旅人たちであったことを思えば、すでに大ヒットシリーズ「東海道五拾三次之



挿図5 小田切春江「有松絞店」【尾張名所図会】前編巻之六 館蔵

内]で、名所絵の第一人者として全国に名前をとどろかせていた広重にチラシを描いてもらうことで、宣伝効果はいや増したに違いない。

他方で春江に依頼が入ったのは、発注側(絞店)がコストパフォーマンスを考えたのだろうが、なによりも『尾張名所図会』挿絵に代表されるように名古屋の名所絵師として、彼の実績がかわれていたためだといえよう。

近年、これらの作品が少しずつ当館へ集まってきた。そこで常設展テーマ10「浮世絵にみる有松絞店」(令和2年(2020)2月26日から3月22日)と、2月29日(土)開催の第8回はくぶつかん講座「有松絞と浮世絵」でお披露目することとした。どうぞ、お楽しみに。

尾張の篆刻家 余延年

●**余延年**(山口九郎左衛門、1746~1819)は、江戸時代後期に活躍した篆刻家である。百済の余璋王の末裔を自称して「余」の姓を名乗った。知多郡大高村(現緑区大高町)で酒造を営んでいたが、本業は家人にまかせ、篆刻や俳諧、作陶など趣味の世界に没頭したという。余延年が制作した印章は評判を呼び、全国から注文があったと伝えられる。本稿では、子孫の家に伝来した資料にもとづき、篆刻家・余延年の業績の一端を紹介したい。

●**印章と篆刻―篆刻家とは**
篆刻とは、石などの素材に篆書(漢字の書体の一つ)を刻み、印章(ハンコ)を作ることである。印章の歴史は古く、中国では秦の始皇帝の時代に形式や制度が整えられたという。古代の印章は、金銀銅または玉といった硬い素材を用いて、専門の職人が鑄造または彫刻するものだったが、明代に入ると、柔らかな石材を用いて私的な楽しみとして印章を制作する人々が現れる。彼らは字体のデザインや構成、刻み方に工夫を凝らし、朱で捺印された印影の美を競いあった。文人趣味のひとつとして明代に流行した篆刻は、江戸時代になって日本に伝えられる。しばらくは明代の様式の模倣が続くが、江戸中期に活躍した高芙蓉(1722~84)は、中国で出版された印譜(印影を集めた書籍)をもとに、秦漢など古い時代の様式の復興につとめ、素朴で力強い独自の作風を確立する。強い影響力を誇り、日本の篆刻の主流を形作った高芙蓉は、後に「印聖」と呼ばれた。芙蓉のもとからは多くの門人が育っていったが、今回の主人公・余延年もその一人である。

伝来資料から窺う余延年の業績

余延年は、延享3年(1746)、尾張の地に生まれた。年少より諸芸に親しんだが、なかでも篆刻に入れ込み、京都に遊学して高芙蓉に師事する。芙蓉の余光にも助けられて、余延年のもとには全国から注文が寄せられた。書画の署名に用いる私的な落款印や遊印のみならず、諸侯の公印まで制作したと伝えられている。

さて以上のような経歴が伝えられる余延年であるが、誰のために、どのような印章を作ったのか、残念なことに現在ではよく分かっていない。自らが使用した数十点の印章が伝来しており、その作風を知ることはできるが、多くの人が争い求めたという輝かしい業績の全貌はつかめない。そこで手がかりとなるのが、子孫の家に伝わった捺印済みの紙片の山で

ある。注文品の手控えとして残された思われるこれらの紙片には、印影に印文と自作であることを示す署名が添えられており、余延年の人気と旺盛な仕事ぶりを証明するものといえよう。

尾張藩校明倫堂の印章

数多くの紙片の中から、今回は「明倫堂」関連のものを取り上げたい。明倫堂は天明3年(1783)に開校した尾張藩の藩校で、藩士の子弟が勉学に励んだ。紙片に捺された「明倫堂図書」印は(挿図1)、この明倫堂の蔵書印として制作されたものと思われる。端書には「銅印亀鈕」と記され、素材と鈕の種類が分かり、「余延年謹篆鑄」と署名も加えられる。藩校の蔵書印という準公的な仕事を受注していることが想定できよう。

さてこの「明倫堂図書」印であるが、幸いなことに印章そのものが現存しており、名古屋市蓬左文庫に所蔵されている(挿図2)。亀鈕の素朴な造形が愛らしい銅印であり、紙片の情報通りであることが判明する。この印章は明倫堂の旧蔵書に捺印されており(挿図3)、実際に使用されたことが確認できる。「篆刻」とは異なり、鑄型を用いて鑄造する銅印であるが、飾り気のない素朴な印影と併せて、古風な様式を愛した



挿図1 印紙「明倫堂図書」印 館蔵(知多郡大高村山口家資料)



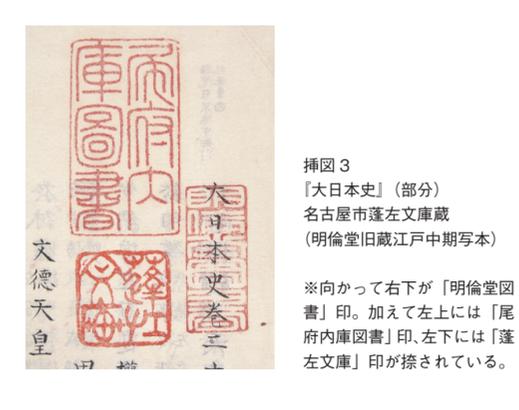
挿図2 亀鈕銅印「明倫堂図書」 名古屋市蓬左文庫蔵

という余延年の作風を知る一例となり得るだろう。なお、紙片の中には同じく「余延年謹篆鑄」と署名が付いた「尾張国校蔵版」という大きな印章も記録されている(挿図4)。こちらは明倫堂にて復刻出版された明倫堂版と呼ばれる書籍に蔵版印として使われたものである(挿図5)。以上の二例から、尾張を代表する篆刻家として活躍する様子が具体的に分かるのである。

伝来する紙片には、試作品や納品に至らなかった失敗作の印影も含まれると思われ、紙片のみから業績を窺うことは早計であろう。明倫堂関連の印章のように、印章の現物や使用状況とあわせて考える必要がある。膨大な山の中には、彦根藩のような譜代の雄藩の為に制作したと思われる印影も含まれており、偉大な業績を明らかにすべく今後も検討を進めていきたい。

尾張藩校明倫堂の印章

●**余延年の印章**
余延年の印章は、尾張藩校明倫堂の蔵書印として制作されたもの(挿図1)と、尾張藩校明倫堂の蔵書印として制作されたもの(挿図2)の2点がある。尾張藩校明倫堂の蔵書印は、尾張藩校明倫堂の蔵書印として制作されたもの(挿図3)と、尾張藩校明倫堂の蔵書印として制作されたもの(挿図4)の2点がある。尾張藩校明倫堂の蔵書印は、尾張藩校明倫堂の蔵書印として制作されたもの(挿図5)と、尾張藩校明倫堂の蔵書印として制作されたもの(挿図6)の2点がある。



挿図3 印紙「尾張国校蔵版」印 館蔵 (知多郡大高村山口家資料)

挿図4 印紙「尾張国校蔵版」印 館蔵 (天明七年序明倫堂版)

挿図5 印紙「尾張国校蔵版」印 館蔵 (天明七年序明倫堂版)